

Q 県が関係するホームページ運用のチェック体制について。

A **総合企画部長** 県はホームページの構築・運用を委託する際、DX推進課を事務局として、情報システム計画審査会と調達審査会を設置しています。計画審査会では予算に合わせたセキュリティ対策の経費が確保されているか確認し、調達審査会では発注前に仕様書にセキュリティ要件が記載されているかを確認しています。

Q DXを推進する中で、全庁的には業務改善が図られている一方で、DX推進課自体の業務は平成28年度以降どれだけ業務量が増えたのか。

A **総合企画部長** 県が運用するホームページ数は、平成28年度は37件でしたが、現在は49件に増加しています。県庁業務の効率化、データ連携基盤の整備、システム標準化等に向けた市町の支援、Aの活用、デジタル人材育成、びわ湖情報ハイウェイの更新など、事業の高度化・複雑化が進んでいます。また、全ての県民が豊かな生活を実現できる暮らしのDXと、持続可能な産業を実現する産業のDXの実現に向けた地域や企業団体、大学、市町等との連携推進など、DX推進課の業務量は今後もますます増加すると見込まれています。

Q 平成28年度以降のDX推進課の人員体制について。

A **総合企画部長** 現在DX推進課では2つの係1つの室で25名体制で業務を行っています。平成28年度の情報政策課の人員体制は、2つの係1つの室で22名体制でしたので、3名増加となっています。

Q 広島県では、専門的なIT人材を確保・育成するため「情報職」新設や手当制度を導入し、民間との差を埋めて優秀な人材を集めやすけている。本県でもこのような「情報職」を採用するなど、DX推進体制をあらためて強化すべきと考えるが。

A **知事** 社会のデジタル化が急速に進む中、情報セキュリティを重視しつつ、DX推進のための体制強化は重要です。専門知識を持つ職員の確保方法として、外部採用と内部育成の両

方を検討し、それぞれの効果や課題を早急に検証・研究していきます。また、業務の集約や専門職員の配置など、組織体制の工夫も重要であり、全職員がDXマインドを持つことで、組織文化の変革を目指していきます。

死生懇話会と県政推進について

長野県の伊那食品工業の社長であった塚越さんはその著書の中で、人生には必ず終わりがあるのだから、ただ情性で過ごすのもつたない、人生の時間を大切に、積極的に楽しみや意味を見出して生きることの重要性を説いています。私は、この塚越さんの影響を受け、様々な場面において「人生は有限である」といったことを話してきました。

実は、三日月知事も「人生は有限である」といった主旨のことを何度か挨拶の中で述べられていたことがあり、私の考えと似ているなと思っていました。

その三日月知事が2020年の年始の庁内向け挨拶で「死」と向き合う場をつくり、「死を見据えることで「生きる」ことをより大切にしたい」と述べられたことをきっかけに、死生懇話会の取組が始まりました。この言葉は時間軸で「死」と「生」を意識する私にとっても非常に印象的だったことを覚えています。

そこで死生懇話会について次の質問を行いました。

Q あらためて死生懇話会の目的について。

A **知事** この会は、誰も避けられない「死」について、行政も正面から考えることで、「生きていくこと」や「生」についてより深く理解し、充実させるヒントを得ることを目的としています。これまで宗教観や行政の境界として避けてきた結果、見落としていたものや見えていなかったことに気づき、「生きていくこと」や「共に生きること」を大切にしたい県政を創りたいという思いで取組んでいるところです。

Q 死生懇話会のこれまでの成果について。

A **知事** これまで行った死生懇話会の取組に延べ約1300人が参加し、多くの人に「死」について考え、語る場の意義を感じてもらったことが

でき、不安や孤独が和らいだとの感想がありました。「死や「生」を語ることが社会の課題を理解するきっかけになっている」と実感します。私自身も視点視座引き出しが増えたと感じており、一人ひとりの出会いや語らいを大事にしよと、以前よりも強く思うようになりました。県民への伝え方や施策についても一定の成果はあるものの、伝えきれていない部分もあるため、今後も議論を深めて取組みを充実・推進していきたいです。

Q これまでの取組をまとめた書籍が今年2月に発行されたが、死生懇話会の書籍化のねらいについて。

A **知事** 約5年間にわたり、懇話会の議論と死生に深く関わる方々へのインタビューを通じて、言葉や思いを蓄積してきました。その蓄積とともに、滋賀県が大切にしてきた思いと根源を熟議し、社会へ問う手段として書籍を刊行することを決定しました。書籍には、死と生に関わる人々の深く優しい言葉や多様な考え、コロナ禍に行政が根源的テーマを議論した過程と気づきなどを収め、県民はもろろん全国へも広く伝えたいと考えています。情報誌とは異なる形で県の取組と心根を伝え、県のPRにもつながることが目的です。

Q 死生懇話会の書籍の販売状況について。

A **知事** 初版の発行部数は2500部で、このうち県への寄贈500部を除く2000部が書店へ卸されています。現在の推定販売部数は約1350部です。

Q 行政の仕事には死・生の視点が不可欠で、福祉・産業振興・文化芸術・防災・教育など全分野が死・生と関係すると書籍にもあるが、死生懇話会の県庁内への周知について。

A **知事** 庁内への周知として、電子掲示板の発信とともに、死生懇話会に対する思いを職員へ語り、対話を促進しています。

また、令和2年度には部局横断の庁内ワーキンググループを設置し、趣旨・取組・情報を共有、業務と「死・生」の関係について意見交換アイデア創出の場を作っています。コロナ禍での迷いはあったものの、むしろこの時期だからこそ取組を進

め、臨場感を共有できたと思えています。県のあらゆる分野に関する「死・生」という根源的テーマを庁内で議論する場・時間を確保し、どの施策にも生身の人間・いのち・暮らしを前提に反映させることを目指し、今後も取組を継続し、思いを込めた書籍の周知も含め庁内へ浸透させていきます。

Q 死生懇話会の取組は今年度も続けていくとのことだが、死生懇話会の今後の方向性について。

A **知事** 県は「死・生」という根源的テーマについて、語る場を継続的に設けることの重要性を認識しており、「死・生」も語れる熟議の滋賀づくりを進め、場づくりなどの取組を継続していきます。また、十分取り上げられていない点や未検討点を含め、「死」と生を通じた「幸せ」につながる視点を広く検討し、庁内ワーキンググループなどで議論して持続的で意義のある取組にしていきます。参加者の率直な声は重要な情報であり、今後の施策づくりの糧として活用できるように取組んでいきます。

Q トップダウンで新しい政策が始まる時、どのような政策の進め方となっているのか。

A **知事** 社会の要請と県民の思いに即した政策の立案・推進を重視する。新たな政策・重点施策は、県民の声・市町の意見・統計データ等に基づき、部局長をはじめ職員と議論して練り上げるところです。俯瞰的な視点で新しい視点を促す一方、現場の状況を知る職員と共に創り上げることを大切にかんがえています。今後も多様な意見・指導を受けつつ、議論を重ねてより良い施策をつくり、実現に向け取組みます。

Q 地方公務員法により県職員は、命令遵守と公共利益の実現という二つの義務を同時に果たすことが求められるが、時には政策実行において壁にぶつかることがある。出口が見えにくい政策に、どう道筋をつけていくと考えているのか。

A **知事** 知事として県民の願い・声を自分の仕事の源とし、日夜24時間体制で取組んでいるつもりです。その中で得た県民の声を行政・県の現場

でどう具現化するかを考え、4年ごとに公約としてまとめ世に問うことと合わせ、県内外を回り、得た声や経験を県庁の仕事へフィードバックすることを心がけています。

出口が見えにくい時代だが、全てを薔薇色にするのではなく、みんな考え・つくる働き方がこれからの行政に必要なと考えます。議員や職員に得心してもらえよう、限られた時間と能力を最大限活かすリーダーとして努めていきます。

Q 県内外で知事の担う役割が増えたことで、政策を職員と議論し、方向性を共有しながら進めることが難しくなっているのでは。副知事として、こうした現状にどう対応されるのか。

A **東副知事** 全国知事会や関西広域連合で知事の役割が拡大する中、今年は大阪・関西万博や国スポ・障スポの影響で知事と職員の直接対話の機会が限られていることから、事前協議など様々な方法で情報・課題・論点を整理し、知事の的確な政策判断をサポートしています。今後も庁内状況を細かく見つつ知事の思いを適時共有・確認し、職員と多角的な視点で議論・調整を重ねて、より効果的な施策推進に努めていきます。

Q 最後に、今後の県政推進にあたっての姿勢について。

A **知事** 知事として公務遂行時に最も大切にしているのは愛と平常心であり、それを日々手帳に記し、「三日月」に身を三す。人の為に謀りて忠ならざるが。朋友と交りて信ならざるが。習わざるを伝えしか。」と常に自戒しているところです。

財源と人材は限られているため、有効な配分を見極め、新たな事業を興す際には止める・減らす・変える判断も必要だと考えています。何より、人が人と一緒に人のために働くという観点から、議員や職員との対話・議論を大切に、忙しい時には時間外や書面・様々なツールを活用して交流を図るといったことも大事です。さらに、不易流行の精神で、基本をしっかり守りつつ地味でも重要な行政・県の仕事を重視すべきだと先輩から教わり、まずは「聞く力」を大切に、姿勢を自らに言い聞かせています。東副知事や岸本副知事をはじめとする幹部や多くの職員とともに、これらの考えを実践・体現できるように努めます。

田中松太郎の日々の活動はSNS等で配信しています！

公式ホームページ
Facebook
Instagram

検索 田中松太郎
http://matsutaro.jp/

5/13 大阪・関西万博 自治体・議員向け研修



1周約2kmの大屋根リングを1周したのち、実際の万博会場を視察。事前予約していたパビリオン以外にも、当日予約不要の展示を中心に巡りました。多様な文化と最先端技術に触れる貴重な機会となり、地域の魅力発信や国際交流の拠点として、滋賀県でもしっかりと万博を活用していけるよう、学びを深めました。

6/4 チームしが県議団「大阪・関西万博」視察



滋賀県ブースを中心に、他府県パビリオンもじっくり視察しました。「いのちの遊び場クラゲ館」では西の湖の「ヨシ」が屋根材として使われている[EARTH MAHT]、信楽焼のタイルや椅子、県産木材の三角オブジェなど、滋賀県の素材や技術が光る展示を多数確認し、夜は1000機のドローンショー等も観賞しました。

7/25 大阪・関西万博 「滋賀県デー〜びわ湖サマークルーズ〜」



開幕後3回目の訪問。「うみのこ」を軸に学びと交流をテーマとした1日プログラムで、滋賀の魅力を一日で体感しました。Expoホールシャインハットでの県民による伝統芸能やパフォーマンス等、滋賀の魅力が詰まったひとときでした。滋賀の今と未来を万博という舞台上で全国へ届けられる機会に感謝です。